フランス語冠詞の問題点

島岡　茂

フランス語の冠詞は古くから格・性・数を示す形態素的な役割をもっていた。それを示すためイタリア語と比べてみよう：

le livre, la table, les livres (tables)
il libro, la tavola, i libri (le tavole)

フランス語では *-s* が発音されないから、語尾では性も数も区別できない。イタリア語では語尾だけで性・数とも示されるから、この弁別の役目は冠詞を必要としない。だからイタリア語の語尾母音がもつ弁別機能がフランス語では冠詞に全面的にかかっているのである。その結果、他の言語では冠詞を省くいわゆるゼロ冠詞用法がフランス語には少ない。

Ce sont des livres. — Estos son libros.

Je bois du vin.　Bebo vino.　cf These are books.　I drink wine.

部分冠詞：スペイン・ポルトガル・ルーマニア語にみられず、フランス・イタリア語にみられる。起源は俗ラテン語の部分属格の *de* から出たといわれるが、この用法はとくにフランス・イタリアに多かった：

(1)　*multa aqua — molta acqua* (イ)

(2)　*multum aquae → multum de aqua → beaucoup d'eau*

フランス語以外では形容詞を使う(1)の形式がふつう。

▼　否定の *pas de*, *de bons enfants* の *de* も部分的意味をもつ。

***Du, de la, des* の誕生**：最初は限定されたものの部分を示すため定冠詞（指示詞、所有詞）と結合した。この例も俗ラテン語からみられる；*de illo pane*（そのパンの一部），*de venatione mea*（私の獲物の一部）

古フランス語では XIe～XIIe 世紀からみられる；*del sanc e de la char*（血と肉），*de l'ewe de la cisterne*（水槽の水の一部）

限定されない(いくらかのの）用法；XIIe～XIIIe 世紀にかけて定冠詞が限定の意味を失い、普遍性の指標になるころから、量的不定冠詞といわれる今日の部分冠詞が生れた；*Verse del vin.*（ワインをついでくれ）— *cascuns dou pain nous donra*（各自が私たちにパンをくれるだろう）

▼　これらの例も樽のワイン、各自のパンの部分を指したかもしれない。この時代にはまだ古い *de* の用法が少くなかった；*Et altres de vin boivent*（他のものはワインをのんだ）

▼　スペインの『エル・シッド』にみられる形はガリシスムだろう；*cogió del agua*（いくらかの水をあつめた）

不定冠詞 *des* ：*XIV*^{e}世紀ごろから部分的意味がうすれ、不定冠詞複数形に移行した。このころ語末の *-s* が発音されなくなったことがその主な理由だったろう；*Voilà des élèves de notre classe*（わがクラスの生徒たちの一部），*Voilà des élèves*（生徒たち）

▼ 部分的用法の名残り：*de ses novelles*（かれからの便りの一部、多くは *une de ses novelles* の意）

▼ アルカイックな文体では *XVII*^{e} 世紀まで無冠詞で使われた。多くは動詞で複数が示されている：*Ce sont pures idées — Molière*（ただの思付きだ）

フランス語の冠詞には古い限定の意味と新らしい指標（マーク）としての用法が併存しているため、ときに紛らわしいことがある。性・数の形態素としての役割はとくにフランス語に特有なものと考えるべきだろう。